

「ソーシャル・キャリアコンサルタント」として生きる

牛久市 五十嵐 郁一

「ご自分の働き方を「ソーシャル・キャリアコンサルタント」と定め、児童養護施設で暮らす子ども達の退所後の自立を支援する五十嵐さん。その生き方がフジTVの「ザ・ノンフィクション」に取り上げられました。」

私は現在52歳ですが、産業カウンセラーの資格を取得したのは2006年です。今までは、養成講座で学んだことを拠り所に、企業に勤める社員として、主に研修の企画開発・運営や講師など、人材開発に関わる仕事をしてきました。今年の1月には、国家資格キャリアコンサルタントの資格も取得しました。

それを機に、今までの自分の生い立ちやキャリアを振り返り、自らの「働き方のスタイル」を「ソーシャル・キャリアコンサルタント」と定めることになりました。

私が考える「働き方のスタイル」とは、生計を立てるための手段とか、所属している組織などの枠組みを超えた「個人としての在り方」のようなものです。

「ソーシャル・キャリアコンサルタント」という言葉は、私が勝手に作った造語ですが、その役割を次のように定義しています。

「キャリアコンサルタントの知見・手法を活かし、人が秘めている潜在的な力の開花

を起点に、より良い組織・社会への変革を目指すし、社会的課題の解決に貢献する」。

言葉を変えれば、「社会起業家×キャリアコンサルタント」という掛け合わせになります。

ここでいう「社会起業家」とは、NPO法人を立ち上げたり社会福祉の分野で働いたりする人という狭い意味ではありません。私は、企業などの営利組織にいても、社会貢献の志を持ちながら目の前の仕事に取り組んだり、ボランティアとして活動したりするならば、誰でも「社会起業家」であると考えています。

そのような考えを持つようになったきっかけは、企業で勤務しながら通学した社会人大学院での学びです。2015年に入学し、その後2年かけて経営情報学修士(MBA)の学位を取得しました。

そこで学んだことで最も大きかったのが、前述した「社会起業家」としてのスタイルです。「社会起業家」として大切なのは、自



らの原体験を自覚することです。それが社会的課題を解決するための動機となるからです。

私は、子どもの頃から父がアルコール依存症になり、暗く貧困な家庭で育ちました。色々苦勞もしましたが、今では、ささやかながら幸せに暮らせるようになりました。

大学院で学び、そのような自らの「原体験」と向き合う中で、過去の自分と同じような痛みを抱えた人々のために何かしたいという気持ちで、だんだん強くなってきました。

親が、アルコールや薬物、ギャンブルなど

に依存したり、暴力を振るったりする家族のことを「機能不全家族」と言います。最近では、児童虐待の報道も増えていますが、機能不全家族や貧困が世代を超えて連鎖する「負の連鎖」が日本の社会的課題となっています。そのような背景から、今は「ソーシヤル・キャリアコンサルティング」として、そのような「負の連鎖」を断ち切ることに貢献したいと思っています。

そこで最近始めた活動が、児童養護施設で暮らす子ども達へのキャリア教育です。児童養護施設とは、虐待や貧困など、何らかの理由で実の親の元で暮らすことが困難になった子ども達を保護し、養育する施設です。

そこで暮らす子ども達は、原則として、18歳になると施設を退所し、自分で住むところを確保して、自立して生計を立てなければなりません。しかし、頼れる家族も無く準備不足の状態です。社会に出てしまい、孤独や貧困に苦しみドロップアウトしてしまうケースが多いことが課題となっています。

そのような悲しい現実を少しでも変えるために、つくば市の児童養護施設で暮らす中高生を対象に、退所後の円滑な自立を目的としたキャリア教育プログラムを立ち上げました。無償で、自らプログラムを開発し、講師も務めています。

児童養護施設の子ども達は、その生い立ちから、自己肯定感や自己効力感が低くなりやすい傾向があります。また、経済的にも自立

しなければならぬため、施設にいる間に、しっかりとした現実的な「キャリア戦略」を立てておく必要があります。

今年の9月からプログラムを開始しましたが、子ども達の振り返りを見ると、「今まで先のことを考えていなかったので不安になった」という声もありました。

実際に始めてみると、遊びたい盛りの中高生達に、将来の職業生活について現実的に考えてもらうことの難しさを実感しました。「強いられた自立」に直面させられる子ども達の状況に対して、心に痛みも感じています。

今までも仕事で教育には関わっていましたが、それは企業の社員が対象でした。家庭で負った心の傷を抱えた子ども達に接すると、そのギャップの大きさに悩むこともありま。施設の職員の方と一緒に、走りながら手探りで進めているところです。しかし、子供たちから学ぶことも多く、大きなやりがいも感じています。

その他に、主に機能不全家族の元で育ち、生き辛さを抱えた若者を対象とした一般向けのイベントも開催しました。

安心して自分の心の傷と向き合うきっかけの場を創りたいという願いを込めて、「いやしのプチ心理学カフェ」その生きづらさは、あなたのせいじゃない」というタイトルで、インターネットで参加者を募り、気楽に対話できる場をつくりました。

そのイベントの実施や私自身の生い立ちに

ついて、社会人大学院を舞台とした「ザ・ノンフィクション」というドキュメンタリー番組の取材を受け、昨年の7月にフジテレビで放映されました。

また、ある大学では、「社会を蝕む貧困の連鎖」というテーマで、約200名の学生の方を対象として、私の原体験を元に講義をさせて頂きました。

このような活動を修行の場として、これからも、自分なりに「ソーシヤル・キャリアコンサルティング」としての生き方を極めていきたいと思っています。

これからは、産業カウンセラーも、「産業」という言葉が象徴するように、経営・ビジネス・教育などの領域での活動がより重要になると思います。

最近では、周知の通り、キャリアコンサルタントだけでなく、「認定心理士」という国家資格も誕生しました。

そのような環境の変化を踏まえた上で、「産業カウンセラー」の独自性を自分なりに考えると、「産業と心理の統合」というキーワードが浮かんできます。

私の「ソーシヤル・キャリアコンサルティング」というスタイルの基盤は、やはり、産業カウンセラーとしての知識やスキルです。

多様なバックグラウンドを持った産業カウンセラーの皆様との結束をさらに強化すれば、様々な社会的課題の解決を加速させることができるかと期待しています。